

ゼミ代表者会議 続・テルマエ通信第2号

秋が到来し、気付けば既に街はクリスマスの準備を始めております。皆さま研究の方はいかがでしょうか？私は増淵ゼミのM2 平川です。

前回発行させて頂いた「政策創造研究科ニューズレター 続・テルマエ通信 1号」が大変好評を博し、この度第2号を発行させて頂きました。今回も各ゼミの編集委員の方々より、合宿や視察の模様をレポートして頂きました。各ゼミで行われている「政策創造研究科横断プロジェクト」概要と併せてお楽しみくださいませ。

【そもそも「テルマエ」とは？】

古代ローマの多くの都市に少なくとも一つの公衆浴場があり、社会生活の中心の一つになっていました。古代ローマ人にとって入浴は非常に重要だったそうです。彼らは一日のうち数時間をそこで過ごし、時には一日中いることもありました。裕福なローマ人が一人か複数人の奴隷を伴ってやってきたそうです。

このテルマエ通信は、そんな古代ローマ人にとって、「テルマエII 公共浴場」が社会生活の中心であったように、ゼミ代表者会議が中心となって政策創造研究科全体を「横に」繋げようという思いで始められました。

【恩田ゼミ】

恩田研究室では、八月二十九日(水)から九月二日(土)の日程で、静岡県浜松市にて現地調査を行いました。本調査の目的は、戦後に建てられた「共同建築」の活用の方策を研究することです。

戦災によって焼け野原となった浜松。個人だけでは家を建てるのが困難な中、共同で家を建てる「共同建築」が、浜松のまちに多く建設され、活気あるまちがうまれました。しかし、現在では老朽化や共同管理の建物のため、建て替えの容易に行えないなど問題が起きています。実際のまちを歩き、どれくらい共同建築が存在し、利用されているのか。土地所有者、共同建築の所有者との関係や、どのような問題をかかえているのか、インタビュー調査を行いました。

まちを歩き、数多く存在する共同建築は、どれもユニークな外観、

デザインをしています。この共同建築を地域の歴史的・文化的資源と位置づけ、建設過程、経年変化、現状課題、今後の利活用の方策を検討したいと思います。そして、地域資源や創造的な活動の場としての共同建築の価値や魅力を広く内外に周知していこうと考えています。(文責 富永)



【岡本ゼミ】

岡本ゼミでは、今夏多くの視察やプロジェクト活動を行ってきました。岡本ゼミでは、ゼミ生の人数が多いこと、また、抱えているプロジェクトや視察日程が多いことなどから、なかなかゼミ生全員が集まることは難しく、皆が集まる合宿等はありません。その代わりに、我々のゼミでは各々のゼミ生が志や関心をゼミに持ちより、そこからプロジェクトという形で同志を集めて視察や遠方活動を行っていきます。つまり、各々の特定の関心事や問題意識をプロジェクトという形で実践活動を行えることが岡本ゼミの面白いところだと思います。今年、以下のプロジェクト活動または視察を行ってまいりました。

- ・地域活性化学会 (高知県)
- ・構原町、四万十町視察 (高知県)
- ・みなかみ町プロジェクト (群馬県)
- ・遠隔授業プロジェクト (埼玉県、北海道)
- ・久慈市プロジェクト (岩手県)
- ・七尾市プロジェクト (石川県)

- ・早川町プロジェクト (山梨県)
- ・飛騨高山プロジェクト (岐阜県)
- など

全てを紹介することはできませんが、簡単に各々のプロジェクト・視察についてご紹介したいと思います。8月に行った久慈プロジェクトでの視察では、シヤケの養殖場の現場や循環エネルギーシステムを確立しているくずまき高原を視察し、今後の日本の漁業の可能性や循環エネルギーシステムについて議論を交えながら学んでいきました。また、今夏複数回にわたって行っている遠隔授業プロジェクトでは、大学等の専門かつ高度な教育機関があまりない地方部で、遠隔での授業環境を整備することを目的に、8月に北海道へ渡り、市民活動に積極的な伊達市、室蘭市、札幌市での遠隔教育の現状と課題について聞き取り調査を行いました。今後は、更に聞き取り調査と視察を重ね、今後の遠隔授業の可能性について精査していく予定です。

このように、岡本ゼミでは、皆さんの問題意識や関心事をプロジェクトとして具現化でき、かつ様々なプロジェクトに参加して様々な地域を見て回れることで、沢山の学びや刺激を得ることが出来ます。今冬もプロジェクト活動に伴う様々な遠方活動や視察が予定されているので、機会があればまたご報告させていただきますと思います。(文責 増成)



【北原ゼミ】

北原研究室の夏合宿は、9月14日(金)～15日(土)の日程で行いました。視察場所は、樹研工業(愛知県豊橋市)、名古屋城(名古屋市)、トヨタ博物館(同県長久手市)です。

北原先生および研究室のメンバーほか、OBOG、他研究室からの参加希望者を含め12人が参加しました。

樹研工業は、世界最小「100万分の「グラムの歯車」を作った会社」として有名です。坂本光司先生の『日本でいちばん大切にしたい会社』にもとりあげられています。私たちは定年制、人材採用と育成、組織力というテーマで、松浦元男代表取締役にお話を伺い、工場を見学させていただきました。

名古屋城には、緊急雇用対策事業として始まり、成功を収めた「おもてなし武将隊」を見に行きました。あいにくの天気でも「おもてなし武将隊」のパフォーマンスを見ることはできませんでした。信長から「よう参られました」と声をかけていただけました。かわいい女性の門番さんもいて、記念写真を撮りました。

トヨタ博物館は、トヨタ自動車設置・運営しているもの。ガソリン自動車誕生から約100年間の自動車の歴史をテーマに、トヨタ車だけでなく各国、各メーカーの自動車が体系的に時系列的に当時の文化と関連づけて展示されています。できる限り動態保存にしていりというのも、同博物館の大きな特長です。「三丁目の夕日」の時代の三輪車が懐かしく思えるゼミ生や、MR2に自分の青春を重ね合わせて見つめているゼミ生もいて、社会人大学院ならではの光景でした。こうした博物館・美術館はCSRの一環(メセナ)として、当研究室の合宿でもできるだけ訪問するようにしています。(文責 重山)

【諏訪ゼミ】平成24年10月15日

残暑厳しい9月15,16日、神奈川県秦野市の鶴巻温泉にて諏訪ゼミ合宿を実施しました。参加メンバーは、諏訪先生・博士課程・修士課程・研究生を含め10名で、初日からさっそく白熱した議論が展開されました。

1. まずはじめは、クローズアップ現代のDVDを通じて、TED(世界の叡智が講演をおこなう極上のカンファレンス)について学びました。諏訪ゼミでは、エデュケーション+エンターテイン

メント+エデュテインメントを大切にしていますので、TEDの発想は示唆的であるとともに重要です。

2. 次に「60歳定年制」を提唱している東京大学大学院教授・柳川氏の記事を輪読後、6グループにわかれ、どうやって日本の社会人に「学び直し」をさせるか?について議論しました。先進国の中で、日本ほどに社会人の多くが勉強しない国は珍しく、社会人で勉強する人でも、もっぱら目先のことを勉強するばかりの社会になっていきます。世界全体がグローバル化・知識社会化へと進んでいく中で、今後日本社会はどうしていくのか?「学び直し」が恒常化する欧米と比べたとき、日本は停滞する社会になっていないか?等、様々な視点と多面的な角度から考えていきました。

3. 雇用に関する具体的な事例研究では、大手小売企業が希望退職を募らず人員を活用する方策として、傘下にあるコンビニエンスストアの店長職(パート)を募集したところ、多数の応募があった事例や、欧米諸国では早期リタイアによって年金にインセンティブが付与されるよう設計されているといった事例を踏まえ、日本の社会人大学院の在り方についても議論が及びました。

4. 最後は地域雇用について、具体的な2つの事例を紹介したDVDを鑑賞し、議論しました。他社に真似できない接ぎ木苗の技術を開発し上場した、岐阜県の「ベルグアース(株)」と、ユニークな結婚式のプロデュースで上場した、佐賀県の「アイ・ケイ・ケイ(株)」です。「地方」に元気な会社と雇用があるという事実から、「地域活性化」をテーマに議論した結果、①地方のリズムと社会全体のリズムは必ずしも一致していないのではないか

②今後は地方から積極的にアイデアを生み出し社会全体へと繋いでいく方向が重要である ③それらの中・高等教育機関の中で教育することにより、再び地方へと循環し還元されていくのでは

ないだろうか ④地方そのものが、より柔軟になっていくにはどうしたらいいか ⑤人や情報を繋ぐネットワークプロデューサーのような人材を地域に呼び込むにはどうしたらいいか等々、深い議論がなされました。

翌日は、諏訪ゼミの特長でもある「学んだことをすぐやってみよう!」の精神に基づき、前日に学んだ「ED」の手法を使って、各自がA4の紙一面に「研究の進捗状況」をイメージとして絵に描き、プレゼンテーションをしました。また、論文の進捗状況を報告し、最後は集合写真の撮影と一本ペをもって、年に春秋2度ある合宿の秋の部は終了となりました。

参加者全員が「学習共同体」として刺激を受け合い、知的探究心を満たした本合宿は、諏訪ゼミならではの実り多い1泊2日となりました。(文責 姜)



以上

【坂本ゼミ】

夏合宿（9月2日〜4日）四国で一番大切にしたい会社を探す旅

「障害者の工賃は時給50円。月収8000円で胸を張って生きられますか？」

就労支援の「ワークスみらい高知」でのお話には胸を打たれました。

私は、少しじわるな質問をぶつけてみた。

「百人以上の障害者を最低賃金ギリギリで働かせる。これも一種の『貧困ビジネス』じゃないですか」

竹村さんは

「福祉ではなくビジネスとして成立させているのだから、そうかもしれないですね」

と笑いながら答えてくれました。

「ビジネスとして成立しているのだから、あのケーキを百円ではなく三百円で売って、私が百万円の給料とつても誰も文句は言わないですよ。でも、少し考えて下さい。障害者が、福祉という市民の税金にすがって生活すると、自立して逆に税金を納める側になるのでは、社会に対するインパクトが2倍以上違うはずですよ」

それを『僕のちっぽけな正義感』と表現していました。

二日目は高松丸亀商店街再生。

実はこの事例を手がけたという触れ込みで全国を講演して歩いている建築士さんのあまり芳しくない噂を聞いていましたので、古川理事長の

「これは成功ではありません。これから成功していくのです」

という言葉には説得力がありました。

「全国の失敗事例でわかるように、都市再開発法第75条の『原則型』を適用し、反対者を排除すれば、あつという間に地域コミュニティが崩壊します」

「再開発法第110条『全員同意型』が必要なのは、所有者と使用者を明確に分離させても、コミュニティはその後何十年も残るからです」
特に

「中心市街地の発展を阻害しているのは、実は商店主自身なのです」という言葉は重たいと思います。

三日目は株式会社いろどり。

町の半数近くを占めるお年寄りが活躍できるビジネスはないかと模索し、1987年に「葉っぱビジネス」をスタートさせました。

そのきっかけは

「ある日、すし屋さんで、隣の女性たちがツマモノのみじの葉っぱ

をわあきれい。持って帰ろうとハンカチに包むのを見たんです。そこで葉っぱを売ろうと思いついたんです」と横石社長は語ります。

「葉っぱを売る？タヌキじゃあるまいし」

「こんなもん売ったら恥ずかしいって道も歩けん」

・・・それでも絶対いけるといって強い確信のもと、最初はたった4人

のおばあちゃんたちの協力で事業は始まりました。

でも最初はさっぱり売れません。そこで横石さんは思い切って料亭

の板場に行きました

「そんなウラをみせるやつがどこにいる？帰れ！」

と追い返されます。その際の「仰天エピソード」も披露していただきました。本当に命がけだったのですね。

その他、四国管財、ネットトヨタ南国、徳武産業、さいさいきて屋、渦潮電気、西精工、池内タオル、マミーズファミリーさんにもご協力いただきました。（文責 鈴木）

写真は西精工のみなさんと。



【小峰ゼミ・池永ゼミ】

朝9時の、改装中の東京駅。土曜日ということもあり、駅前の人通りは静穏だったものの、首都のターミナルであるこの駅の中には多くの人が行き来していた。このような流れに紛れることなく、私たちのゼミは、無事集合することができた。これが、ゼミ合宿の始まりである。実は、ここに至るまでいくつかの経緯があった。学校のゼミの旅行なのだから、大学の施設に泊まるべきか、使わないとしてもどこに行くべきか。それもなるだけなら安いほうがいい。当初は海外というアイデアも出たが、まともならず、昨年ゼミで訪れた震災後の東北にしようということになった。しかし東北といってもどこにするのか？ 数回にわたって議論がなされたが、結局合計2日間の旅行のうち1日目は仙台駅周辺で全体行動、2日目は3グループに分かれて行動しようということに合致した。何せ17人もいる集団は、大人とはいえ意見が分かれるのである（なお、今回の旅行は4名の欠席と、1名の早退と、岡本ゼミの増成氏の受け入れを伴った）。

こうして、私たちは9時36分発の新生「はやぶさ」に乗った。筆者個人として大きな楽しみであった新幹線も東の間、仙台に昼前に到着した。ここで、駅の裏通りに入り仙台名物・牛タンの定食を食べた。

肉はもちろん、出汁がきいた牛のスープが如何せんとも美味しかったことを今でも覚えている。昼食後は、市の会議室を貸し切って石巻市復興対策室職員の近藤氏をお招きした「講演会」と、私たちのゼミ恒例の伝統行事（？）の「エッセイ発表会」があった。前者「講演会」では、石巻を震災が襲った時の動画や、今後の復興計画、石巻の紹介、復興に際しての課題をお話いただいた。今後の課題としては、やはり若者の不足や企業の誘致が問題となるそうだが、筆者は20代の人として、食べ物に恵まれ、都会よりスローな生活ができる地方の魅力は十分に伝わってきたように思う。後半の「エッセイ発表会」は、各人が1000字ほどで、問題関心に基づいて主義主張をまとめ、発表後議論を行う、といったものである。身近な話題から、教育や交通、経済や政治に関するものまで幅広くディスカッションが行われ、いつもにも増して各々の問題意識が色濃く反映されていたようだった。

勉強的（？）な旅程も瞬く間に過ぎ、仙台の商店街にある酒屋で小宴会があった。始まるやすぐに雰囲気や和み、普段見られない表情があちこちにあった気がする酒の席だった。その後ホテルに戻り、なおも遊び足りないグループは（筆者もその一人である）カラオケに繰り出し、大いに盛り上がった。ゼミでは絶対にお目にかかれないような笑いや熱唱を拝見できる貴重な機会であった。

2日目は、朝食後、3台のレンタカーに分かれ、それぞれ①石巻方面②女川・気仙沼方面③岩手・大船渡方面に車を走らせた。ここからは、筆者が①グループにいたため主に石巻方面の話になる(②グループは、ある程度①と行程が重複していたようであり、③グループはアクティブに岩手方面の各所を遅くまで回っていたようである)。さて、筆者らのグループは、仙台→石巻→大川小→南三陸町→松島→仙台というルートを通ってきた。石巻では、高台にある日和山公園に寄り、今もなお津波の傷が残る石巻沿岸を俯瞰した。その後沿岸部の被害がひどかった箇所を回り、傷痕の大きさを痛感してきた(建物の3-4階まで水につかった跡があり、がれきの山や草地と化した住宅街の様子から伺い知ることができた)。ここから、数10km走り、建物ごと飲み込まれた大川小学校を見たが、実物を見るのは大違いであった。昼食後、南三陸町に移動し、ここでも震災のすさまじさを目の当たりにした。1年半が経過しているというのに、海岸に近い街は平原と建物の骨格だけが残り、港の設備も被害を受けていた。そんな中でも、わずかに街の中にプレハブのコンビニや仮設住宅が建てられており、希望が少し見えたようにも思えたが、いずれにせよ復興は長期戦になりそうだというのが率直な感想であった。その後、予定より早く行動できていたため、急ぎよ松島を散策することになった。松島は、海際であるにも関わらず、ほとんど被害の形跡は見られなかった。震災時は建物の1階まで泥水が侵入してきたそうだが、島々が防波堤になり被害が軽く済んだとのことだった。そうしているうちに、レンタカーの返却時間が迫ってきたため、松島を後にし仙台へと戻った。

仙台発の新幹線の切符を別々に取っていたこともあり、現地解散という形になった。こうして、旅は無事終わり、それぞれ日常へと戻っていった。後期の初回ゼミでは、各々のグループの報告が行われた。東北は確実に復興途中だが長期戦になりそうなこと、地方には都会ではわからない魅力があること、現地の様子は目で確かめるべきだということ。筆者は、帰りの新幹線でそんなことを考えていた。(文責：別所弘基)



(牛タン定食)



(大川小学校)



(南三陸町)

【中嶋ゼミ】

『テルマエ通信』読者の皆様、こんにちは。中嶋ゼミの編集委員、小林拓実です。

今号では、8月16日〜18日にかけて行った中嶋ゼミの新潟合宿の様子をレポートしたいと思います。

今回の合宿における一番のビッグイベントは、新潟県胎内市での「胎内市地域活性化まちづくり意見交換会」の開催でした。この意見交

換会は、ゼミ生である佐藤さんの、「故郷の胎内市を元気づけたい。」という熱い想いから実現したものです。短い準備期間であったにもかかわらず、中条町商工会様のご協力もあり、多くの方々にご参加頂きました。

会議では佐藤さんの司会進行のもと、胎内市の現状認識を住民の方に語って頂き、「胎内市の特産品として、何を推し進めていくべきか。」を中心に議論を進めました。胎内市は日本で初めての米粉専用工場がつけられたことから、「米粉発祥の地」とPRしておりますが、その事実はあまり知られておりません。また、市町村合併の影響を受け、街全体がひとつになりきれない現状もあります。こうした中で、「住民の皆様が誇りに思える特産物」を生み出していくことは、そう簡単ではないと感じました。終了予定時間を過ぎても白熱した議論は続き、第2回の意見交換会を今冬に実施する運びとなりました。

翌日からは、地域活性の成功例として知られる、越後妻有トリエナーレ「大地の芸術祭」に行ってみました。「大地の芸術祭」は、越後妻有地域の里山を舞台に3年に1度開催される世界最大規模の国際芸術祭です。広範囲に渡って作品が展示され、一部の地域だけでなく、全体が活気づくような仕組みが施されており、非常に勉強になりました。

今回の意見交換会、および「大地の芸術祭」の記事や写真は、中嶋ゼミの Facebook ページに掲載しております。URL は、<https://www.facebook.com/chikizukuri/>です。このページでは、ゼミが手掛けるプロジェクトだけでなく、地域づくり、地域ブランドディングに関する情報をお伝えしていきます。皆様に「いいね！」を押して頂ければ幸いです。(文責 小林)





【増淵ゼミ】

増淵ゼミのゼミ合宿、9月組は長野県小布施町と新潟県越後妻有へ伺いました。はじめに小布施町に関してですが、本校の研究室も設置されており、私たちの研究科でも広く知られている地域であるため詳しい説明は省きます。ここでは小布施堂や町立図書館の関係者の方から、お話を伺いました。そして、両者からは「まちづくり」に関するお話しにとどまらず、プロジェクトを進めるにあたっての心構えのようなどより一般的なお話まで伺うことが出来ました。多くの生徒が在籍し研究内容も様々である本ゼミですが、一般的な話を伺えたため、参加した全ゼミ生全員にとって一定の成果が得られたように思います。

次に新潟県越後妻有に関してです。こちらでは、今年の夏に行われたトリエンナーレである「大地の芸術祭」を見学しました。山間地域にて地域の特性を生かしたアート作品を展示している本イベントですが、非常に興味深いイベントでありました。その内容に加えて、地域と現代アート作品という対照的な存在である一方で、近年のトレンドとなっているタイプの企画へ実際に足を運ぶことで、新たな刺激をあらわれ個々の視野がより広がったことと思います。

一泊二日という身近い期間ではありましたが、非常に中身の濃い旅行になったと思います。そして、今回の旅行を通して得られた新たな視野を個々の研究に生かしていくことこそが、今回の合宿に対する最大の成果となるのではないのでしょうか。(文責 小林)



台湾合宿活動報告

8月18日〜20日まで

視察場所「大愛テレビ、九ふん、士林夜市」

活動メンバー 増淵、木南、木村、東山、清水、杉田、飯田、平川 敬

執筆 木村賢史



初日は羽田空港にて待ち合わせしてエバー航空にて台湾へ。朝早くに待ち合わせしたため全員少し眠そうでした。台湾へは大体9時間ほどで到着。時差が一時あるため思ったよりも早く着いたような気がしました。台北空港にてうちのゼミのあかねちゃんが先に台湾に来てたため合流。空港の外に出た途端むわっとした熱気が、日本でも8月

月は暑いのに台湾はさらにじめっとした暑さでした。そこから電車を使い、台湾テレビ局へ。台湾の地下鉄では切符の代わりにコインを使用している少し戸惑うことがありましたが、無事テレビ局へ。大愛テレビではあかねちゃんが前もって話を通してくれたためテレビ局の方が迎えてくれました。そこで大愛テレビの経営方針について話を伺うことに。大愛テレビを例に台湾では日本と違い、韓国同様ケーブルテレビ(第1台)の普及率が大変高く、世界でも指折りのケーブルテレビ普及大国であり、100局も放送されていて各局ごとにカラーが違うのである。そして、ケーブルテレビを使うからか必ずしも視聴率やスポンサーに頼った経営をしなくていいとのこと。ではどうやって利益やお金を調達してもらうのかというところは大愛テレビでは経営母体が宗教法人慈済基金会なので寄付で成り立っているそうです。

「慈済」の由来は「慈悲為懐、濟世救人」(慈悲を抱き、世を助け人を救う)で慈済基金会(じさいききんかい)、正式には財団法人中華民国仏教慈済慈善事業基金会)

日本でも東日本大震災があった時、慈済基金会では日本の震災に対する特番を組み物資や寄付金を募ってくれたこと。このように日本にもゆかりのあるテレビ局で仏教の教えなど非常にありがたいお話をしてくれたのですが、旅の疲れからか僕を含めポチポチ眠る人が：。お話が終わった後はテレビ局を案内してもらいニュースで使うセットで撮影したりしました。その後は士林の夜市へ。

台湾といえば夜市が有名ですが、向かったらすごい人だかり。日本でいえばお祭りの状況並みに人がいます。若者向けの雑貨や定食屋、お祭りの射的のようなものもありました。中にはこんなものも食べてみましたが骨が多いのを除けば普通の味でした。台湾の夜市は夜の12時半から1時半まで開いており、台湾の熱気ももたらした気分でした。

さて夜市の後は大人のカルチャー大人会が急ぎ

よ発足しゼミ長平川を中心に台湾の林森北路へ。林森北路は日本のスナックやキャバレー、飲み屋街がたくさんある場所です。まさしく夜の街。

ここでひとまず大人のカルチャー大人部は自分たちの行きたいところへ班分けし向かうことに。内容はそれぞれの胸の中へと記憶されましたが、また機会があれば調査をしたいところです。



熱気もすごくこれからの研究へのヒントもあり、みんなの交流も深まり、また来年も行きたくなる場所でした。
以上をもってオトカル台湾部ニューズレターの報告を終わります。
読んでいただいて謝辞 再見。(文責 木村)

- ・木村賢史・小林翔多
- ・姜英順・別所弘基
- ・小林拓実・重山紀子
- ・富永正義
- ・鈴木幸司・平川拓也
- ・増成勇希

2 日目は朝早くから9フンに向かうことに、9フンは元々炭鉱の町だったので、炭鉱が取れなくなってからはさびれる一方でしたが、映画の観光地やロケ地となることで観光客がたくさん訪れる有名な観光スポットに。日本でも有名な「非常城市」、「千と千尋の神隠し」などがあります。9フンは山の上にあるので景色がすごい良く辺鄙な場所ですがうまくシネマツアーリズムを活用して観光地化に成功できていたと思いました。

3 日目は早くも台湾の最終日でした。3日目は自由行動で、皆が行きたいところへ。

故宮博物館に行った人もいれば、市で台湾の映画を買ったりとかでしたが市場は台湾時間に合わせるのか開くのが正午からがほとんどで飛行機のフライトに合わせないといけないためあまり回れないのが残念でした。地下にショッピングモールのようなものがありました。ただ日本と違ってバッテリーのようなものが多くて台湾っぽかったよ。うな。南国だから朝はほとんど市場が開いてないのと、朝は十分熱いため午前や昼間はこのように地下で買い物をするのがいいかもしれません。

そしてなごり惜しく去りました。さようなら台湾。楽しかったよ。なぜかエバー航空の飛行機がキティちゃんでもキティちゃんづくしなのが印象的でした。

夏の暑い時期に行ったからか熱気がものすごく、また台湾の人々の